

# Q：意見と理由が英語で言えるようになるために

安樂 寛

## 1. はじめに

教師にとって発問を周到に用意することは、授業準備の要諦である。しかし、これがなかなか難しい。テキスト本文を何度も読んでみて、内容理解を問うための簡単な質問をいくつか作るだけでも、それなりに時間と労力を要する。さらに、内容について生徒に感想を求める質問を作るとなると、きっと彼らの多くは答えに窮するだろうなどと考えて、そこまでやらずに済ませることが多いのが大方の現状ではなかろうか。

一方、学習者にとって自分の意見を英語で表明するには、二つの壁があるようだ。一つは意見を作り出すという壁、もう一つはそれを英語で表現するという壁である。アイデアが浮かんでこないのは、母語で考えていても起こりうることだ。主張をサポートするための具体例がとっさに思い浮かばない、過去の経験に素早くアクセスできない、論題がやや抽象的で今まで深く考えてこなかったことである、などがその原因となっていることが多い。日本語ではきちんと表現できるが、英語ではどう言ったらよいのか分からないという場合は、自信を持って使える表現のストックを地道に増やしていく必要がある。

いくつかの報告によれば、生徒が英語授業に満足する要因の一つは、「自分の言いたいことがちゃんと言えた」実感が持てていることであるらしい。また、日本の英語学習者の発信能力には伸びしろが大きいというような指摘もかねてよきなされてきたように思う。

本稿は、以上の点を踏まえて、著者が高2「オーラルコミュニケーションⅠ」で行った普段着の授業の実践報告である。授業の目標、使用教材、授業展開を明らかにし、今後の課題について考えてみたい。特に、主教材の1つである *Q: Skills for Success* (Oxford University Press) についてスペースを多目に割いて述べるつもりである。

## 2. 授業の目標

①日常会話レベルの言語と、②アカデミックな言語をバランスよく学習してもらい、大学入試のリスニングテストはもとより、英検や TOEFL などの言語能力テスト、英語で行われる大学の授業に対応するための基礎を養成する。

## 3. 使用教材

日常的な英語の力を向上させるために *Listening Laboratory: Standard β* (数研出版) (以下、 $\beta$ ) を、アカデミックな英語に対応する力を高めるために *Q: Skills for Success Listening and Speaking 3* (Oxford University Press) (以下、 $Q$ ) を用いた。

## 4. 授業展開

1 単位科目なので、週 1 回 50 分の授業を年間 30 回程度行った。基本的に毎回、授業の前半で  $\beta$  の 1 ユニットをやり、後半で  $Q$  をほぼマニュアル通り、いけるところまで進めていくという流れである。進度的には、 $\beta$  はすべてのユニットを終えることができたが、 $Q$  は 1 学期に 1 ユニットずつ、3 学期終了時にユニット 3 の途中までを終えるにとどまった。後述のように、無理して先を急ぐより、生徒の反応をみながら、ゆっくりと丁寧に行い、確実に力がつくことを重視したためである。

### 4.1. 初回の授業

ただし、初回の授業だけは、 $Q$  を扱わずに、前半を教師の自己紹介や授業の概要説明、および教室英語の習熟に費やした。諸般の事情により、この授業は母語話者ではなく、日本人教師が単独でやるということ、基本的に英語は授業で行うので、できるだけ英語で考えるようにしてほしいが、分からなくなったら遠慮なく英語でも日本語でもいいから授業を止めて質問をしてほしいということを英語で話した。

次に教室英語の導入には、control language を紹介したプリント(「もう一度仰ってください」とか、「それはどういう意味ですか」のような表現を集めたもの)を配布して、まずは復唱、次に、プリントに載せておいた表現を使わなければならないようなタスクをやらせて定着を図った。やらせたことは書き取りタスクである。少し難し目の単語のつづり、電話番号、ウェブサイトのアドレス、大きな数をそれぞれ意識的に速く、聞こえないくらい小さな声で読んでいく。すると、期待通り Would you speak more slowly? や Louder, please. などの発話を引き出せる。

Clarification Request (説明を求める言いかた)		What does it mean?
Many 5- to 6- year old children ask a lot of questions. They often say, "なにそれ?" "なに?" or "なに?" Now let's see how to say them in English.		
Language I	Language II	
What?	Pardon me?	
Wait!	Excuse me...	
Slower, please.	Speak slower, please.	
Louder, please.	Will you speak more slowly?	
Once more, please.	Speak louder, please.	
What's (cat)?	Could you repeat that?	
	What does (cat) mean?	
	What does it mean, please?	
What's (cat) in Japanese?	Can you explain it, please?	
What's (neko) in English?	How do you say (cat) in Japanese?	
	How do you say (neko) in English?	
	What's the English word for (neko)?	
Spell (cat), please.	How do you spell (cat)?	
	How do you spell your name, please?	
C-A-T	Did you say (C-A-T)?	

教師は非母語話者ながら一生懸命に英語を使っていることを示すとともに、授業は決して English only ではないから安心してほしいというメッセージを伝えた。

#### 4.2. βについて

多肢選択式の問題演習が主体で、TOEIC や大学入試センター試験にも対応している。付属 CD にはアメリカ英語が2種類のスピードで収録されており、加えて、幾つかのユニットにはイギリス英語、オーストラリア英語も収録されている。費用対効果の面でも優れた教材だと思う。

#### 4.3. Qについて

特徴を一言で言うと、じんわりと Schema activation をした後に Listening があり、内容理解を確認の後、(次が一番のポイントなのだが、)聞いた内容について個人的感想を問う open-ended questions がいくつかあって、自分の意見と理由を述べさせる

ところへ止揚していく。良質なタスクが多数あり、発問も豊富に用意されているテキストなので、教える側としても比較的準備がしやすいのではないかとと思う。レベルも intro から5まで6段階あるので、生徒のレベルに合わせて選ぶことができる。

使用テキストのレベルを選ぶ時には、前年度に当該学年を担当した教員の意見も参考にするとよいと思う。(私の場合は、同僚3名の意見によって、当初採択するつもりでいたレベルよりも数段階上のものを採用することになった。生徒の言語能力や精神的成熟度を踏まえた同僚の助言は的確であったと感謝している。)

順調に軌道に乗り始めた授業であったが、気になる点も出てきた。意見を述べ合うペア・ワークを観察していると、話している内容が日本語でも明瞭になっていないペアが多いのである。

例えば、次のような論題。Have you ever formed a first impression of someone that was wrong? Explain. (人に対して誤った第一印象を持った経験が過去にありますか。詳しく述べてください。)

#### Q WHAT DO YOU THINK?

Discuss the questions in a group.

- In this lecture, the speaker says we often think that the way a person behaves when we first meet him is the way he behaves all the time. From your personal experience, do you agree or disagree? Give examples.
- Have you ever formed a first impression of someone that was wrong? Explain.



First Impressions aren't always correct.

©Oxford University Press

机間巡視をし、数名に意見をクラス全体に発表させると、この程度の抽象度なら、最終的になんとか英語でやっている。ある教科の何某という先生は、最初ものすごく怖かったが、時間が経ってみると…というような答えが一番多い。

しかしながら、次の論題のように抽象度が一段階上がると、学習者の母語で考えても決して易くない課題となるのが、想定通り明らかになった。In this lecture, the speaker says we often think

that the way a person behaves when we first meet him is the way he behaves all the time. From your personal experience, do you agree or disagree? Give examples. (この講義で話し手は、人が初対面時に見せる行動は、その人の常日頃の行動に等しいと述べていますが、あなたの体験に照らして、この意見に賛成ですか。反対ですか。具体例もいくつか述べてください。) 前出の Listening で得た知見を踏まえて、学習者は賛否いずれかの立場を決め、具体例を挙げながら説明しなければならない。

1分間の考慮時間を与えて考えさせたのち、ペアで意見交換。その際、日本語を使いたい者には自由に使用を認めた。最も大切なことは意見を生み出し、交換することであるからだ。このあたりから、意見の「質」に個人差が出てくる。適度な抽象度で大人顔負けの理由をいくつか箇条書きにできる者もいる。一方で、初対面の時に怖いと思ったP先生は今でも怖いと感じるので賛成というような、自らの体験にもとづいた例を述べるにとどまる者もある。さらに、話す内容が思い浮かばずフリーズする生徒も。

クラスサイズが40人前後であったので、当然のことながら一人ですべてのペアを見て回れるわけではない。発話の機会は与えたが、この時点ではフィードバックは与えていない状態だ。このままの状態、つまり生徒によっては発話内容や取り組む姿勢が「適当」な状態のままに次に進む流れを作ってしまったらよいのだろうか、もっと発話内容や使用言語の質を高めるために教師が手間をかけるとしたら何ができるだろうか、と考えた。

同じ科目を教える同僚と出した答えが、次の論題を議論させた後には、「全員に一人1分以内の prepared speech をさせる」ことであった。これにより、学習者全員の発話を教師(と生徒)がモニターすることになる。

スピーチの準備と発表には4週間を要した。まず第1週にブレインストーミングをした後、model answers 入りの提出用紙を配って次週までに原稿を書くよう宿題を出す。Model answers は同僚と手分けして書いて、ネイティブチェックをかけた。この時のポイントは二つあり、一つ目は model answers 中の談話標識を太字にしておくこと。そうすると、生徒はそれをテンプレートとして活用できる

ようになる。二つ目は、英語に自信のない部分には日本語を併記するように生徒に促すこと。そうしないと、あとで教師が読んでも意味が分からず直しようがないので苦労することになるからだ。第2週にはピア・エディティングを授業中に行い、原稿を提出。それを教師が読んで corrective feedback を入れる。この際、原稿に直接正しい表現を書き込まないことにした。その代わりに、誤りを含む箇所には下線と番号を振り、正しい表現は裏面に記入しておいた。また、チェック済みの原稿を全員分コピーしておいた。第3週に原稿返却。下線部をどう直すべきか、まず自分で考えてから裏面を見るように指示を出した。その上で次週までに原稿を暗唱することを宿題とした。第4週はスピーチ発表。一人ずつランダムに指名して教壇に立たせ、聴衆と時折アイコンタクトをとりながら話させた。生徒には評価用紙を配布し、一人一人のスピーチを聞きながら内容とデリバリーをA・B・Cの三段階で評価させた。さらに「私が選ぶベストスピーカー」3名を記入させ、それぞれの長所を書かせた。これは、生徒が自分のスピーチを覚えるという「内職」を始めないで、きちんと仲間のスピーチを聴くようにとの配慮からである。一方、生徒の中には、様々な理由で1分以内にスピーチを終えられない者もいる。そのような時には、適当な意味の切れ目でねぎらいの言葉と拍手を入れて終了させる。とにかく、一人のスピーチが“Thank you for your kind attention.”で終わると、全員が拍手をして努力を讃える。そんな雰囲気ができていたと思う。

その論題がこれだ。Should we make difficult decisions quickly with unconscious minds? (難しい決断は無意識にすばやくなされるべきか。) だいたい60 words 前後で述べることを要求した。それが1学期。2学期はさらに別の論題について100 words 前後で。3学期はまた違った論題について no more than 200 words で、この時は発表中に原稿を見てもよいという条件で行った。

私の担当は3クラス105人、相方の担当は4クラス166人であったので、添削は各担当者が可能な範囲で行えばよいことにした。私は原稿の提出日を学校行事等で1週授業が空く直前の日に設定するなど工夫することで何とか全員のペーパーに目を通すことができたが、網渡りの作業であった。誤りの生起

頻度が高いと、それだけ直しには時間がかかる。100 words 書かせると平均10箇所程度は直さねばならない。1枚の原稿を読んで直すのに10分、Googleを使って正しい表現を探す作業(安藤, 2007)が必要になると30分近く使うことも珍しくなかった。幸いなことに、3学期になると母語話者2名に直しを依頼することができた。高3ライティングを担当する彼らは、3学期になると授業が事実上なくなるからである。彼らが入れた直しの的確さと納品の速さにはうならされた。

## 5. 授業の総括と今後の課題

授業で実践したことを三点に要約すると、①日本語の使用を必要に応じて許容しつつ基本的に英語で授業を進めたこと、②ごく普通に教科書「を」教えたこと、③発話内容の質を高めるためにプロセスライティングの手法を一部に用いたこと、である。

限られた時間数と多人数クラスという条件下で、授業の目的(日常的言語と学術的言語をバランスよく身につけ、聴解力のみならず発話力も高める)はどこまで達成できたであろうか。確かなデータはないが、学習者の技能向上に寄与できたと考えている。

中でも、Qというテキストは、学習者が英語で自分の意見と理由を表現する力を高めるのに良い教材ではないかと感じた。

今後の課題の一つは、即興で発話する力を高めることではないかと感じている。例えば、論題が与えられた後、30秒間の準備時間を経て1分間まとまった内容のあることを話すと、相手の話を批判的に聞いて即座に質問したり意見を述べたりすることができる能力である。

## 参考文献

安藤進(2007)『ちょっと検索! 翻訳に役立つ Google 表現検索テクニック』丸善。

謝辞 当時、同一科目担当で元同僚の寺川新視氏には、授業のアイデア作りや運営に全面的に協力いただいたことをここに記して深甚の謝意を表したい。

(海城中学高等学校教諭)